

次の文章は、一九二六年（大正15年）に発表された葉山嘉樹の小説「海に生くる人々」の冒頭部分である。読んで、後の問に答えなさい。

室蘭港が奥深く広く入り込んだ、その太平洋への湾口に、大黒島が栓をしている。雪は、北海道の全土をおおって地面から、雲までの厚さで横に降りまくった。

汽船「万寿丸」は、その腹の中へ三千トンの石炭を詰め込んで、風雪の中を横浜へと進んだ。船は今大黒島をかろうろとしている。その島のかなたには大きな浪が打っている。万寿丸はデッキまで沈んだその船体を、太平洋の怒濤の中へこわごわのぞけて見た。そして思い切って、乗り出したのであった。彼女がその臨月のからだで走れる限りの速力が、ブリッジからエンジンへ命じられた。

冬期における北海航路の天候は、いつでも非常に険悪であった。安全な航海、愉快的航海は冬期においては北部海岸では不可能なことであった。

万寿丸「甲板部」の水夫たちは、デッキに打ち上げる、ダイナマイトのような威力を持った波浪の飛沫と戦って、甲板を洗っていた。ホースの先端からは、沸騰点に近い熱湯がほとばしり出たが、それがデッキを五尺流れるうちには凍るのであった。五人の水夫は熱湯の凍らぬうちに、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやった。

万寿丸は右手に北海道の山や、高原をながめて走った。雪は船と陸とをヴェールをもってさえぎった。悲壮な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危険の前に裸体となって、地下数千尺で掘られた石炭は、数万の炭坑労働者を踏み台にして地上に上がって来た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危険に、その全身を船体と共に暴露しつつある、船員の労働によって運送されるのであった。

藤原六雄は、ランプ部屋へはいつて、ランプの掃除をしていた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、気むずかしやであった。そして、一体彼は何か仕事をしているのか、どうか疑わしいほど、労働がきらいな性のように見えた。彼の職務は倉庫番であった。

注1 室蘭港

北海道室蘭市にある港湾。

注2 大黒島

室蘭港の入り口にある小島。

注3 汽船「万寿丸」

「汽船」は蒸気機関で動く船。

「万寿丸」は石炭貨物船の名。

注4 かわろう

かわそう、回りこもう、の意。

注5 デッキ deck

甲板。船の構造における床のこと。

ここでは船の内部に位置する中甲板のこと。

注6 彼女

ここでは万寿丸のこと。

注7 臨月

妊婦の出産予定の月のこと。

注8 ブリッジ bridge

船橋（せんきょう）。船舶の高所に位置し、船長が指揮をとる場所。

注9 エンジン

こゝでは、機関室(engine room)のこと。

こゝでは、機関室(engine room)のこと。

ランプ部屋はブリッジに向かい合つて、水夫室と火夫室の間に、みじめに、小さくこしらえられてあつた。藤原はそこでランプのホヤをふきながら、水夫たちが、デッキを掃除しているのを見ていた。彼はこのごろボースンにも、一等運転士にも見込みが悪いことを知っていた。「ストキ（倉庫番）にもワシデッキの時には手伝わてもらわなきゃならん。一万トンも八千トンもある船とはちがうんだからな」と、いつか水夫たち全部がそろつて飯を食つてゐる時にボースンにいわれたことがあつた。

「ふん、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は倉庫の番さえしてりゃ、それで沢山だろう」と、彼は答えた。

——それ以来、どうも、おれは水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、さびしそうに、ストキは考へた。

船のエンジンはフルスピードをかけていたが、風と浪とで速力がまるで出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつてもまだ津軽海峡沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかえそうかとの相談も行なわれたが、それは実行されるには至らなかつた。水夫たちは、暴風雪がだんだん猛烈になつて来るにつれて、その作業も平常とは趣を異にし初めた。船体は保険マーク以上に沈んでいたので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまつた。すくい込む水はなかなか小さな排水口から急には出て行かなかつた。デッキには、ハッチの上を通るように、ライフライン（命綱）が張られた。いつデッキを通ろうと試みても、そこは外海と何ら異なるところはないからであつた。

浪はその山と山との間に船をはさんでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴体へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ちあたる。鉄製のわが万寿丸も、この苦悶には堪えかねて、断末魔の叫びをあげる。ミリミリ、ドタンというなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中でから回りをする。推進器は、飛行機のプロペラーのように空中で回転する。凶暴なその船の太さほどの猛獣のようにほえる。特別装置のないどの棚からも、

注10 火夫

蒸気機関のボイラーを扱う者。

注11 ランプのホヤ

ランプを覆うガラス製の筒。

注12 ボースン boatswain

水夫長。

注13 ストキ

ストアキーパー (store-keeper) の略。

注14 ワシデッキ wash-deck

船の甲板洗い。

注15 ハッチ

船の甲板の昇降口。

注16 とも

船の後方。船尾。

いろんなものが落ちる。ランプのランプからランプが踊り出る、舵機注17は非常にその効力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空転の危険から、ほとんど三マイルぐらいに減じられて、ただ船首を風の方向から転換しないようにのみすべての努力を尽くしていた。

機関室注18の方も汽罐室注18の方も、非常な困難があった。油差しは、動揺のために、機械と機械との狭い部分に入り込むのに、神秘的な注意を払った。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持って、よろけまいとして骨を折った。

汽罐室のま上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度ぐらいに分けて炊かねばならなかったし、お菜も同様な方法にしてなお、汁物は作るわけに行かなかった。

コロップス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭じゅうをこぶだらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかった。

水夫らは、デッキを洗う波浪からタンブル内への浸水を護るために、ハッチカバー（船艙注20のおおい）や、それを押えた金具や、またその上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかった。それは危険な作業であった。そしてこの危険な作業なしには、この船全体が危険から免れうる方法がなかった。あだかも意地の悪い馬がなれぬ乗り手にするように、船体は猛烈にその背を振った。そしてそのたびに柄杓注21が水をすくうように、デッキは波浪をすくい込んだ。ロープはぬれて、固くなって操作に非常な困難と遅滞とを招いた。しかしそれは成し遂げなければならぬ仕事であった。ハッチが水を飲むということは、文句なしに、簡単—明瞭注21に船体の沈没を意味するものであった。五人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との八人が総動員で、この仕事を遂げた。

彼らはそのからだだが、そのまま凍るような風の下に、メスのように光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、あまり動かない部分をカンカンに凍らせた。

船体の危険と、船体と共にする自分自身の危険と、そして、ときめんに自分の凍えんとする肉体に対する危険とは、火事が中風の婆注22さんに、石臼注22を屋外まで抱え出させたほどの目ざましい、超人間的な活動を、水夫たちに与えた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備ができ上がった。

注17 舵機

船の舵。操舵機。

注18 汽罐室

ボイラー室のこと。蒸気を発生させる空間（室）。

注19 タンブル

貨物を積み込む船倉。

注20 船艙

船舶で荷物をしまっておく場所。

注21 あだかも

まるで、ちょうど。「あたかも」と同じ。

注22 中風

脳内出血などによって起こる、半身不随や麻痺の症状。

まだ二つのハッチが船尾の方に残っていた。そして、時間は今夕食に迫っていた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢えを感じて、わが万寿丸をもうとしているのであった。

船は絶えずもがき、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギン^{mast}は絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するようになり合った。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる知恵とをもって戦闘した。

注23 リギン rigging

船やヨットに使われるロープ。

問 この作品では、自然や人間や船その他がどのように描かれているか。その描かれ方の特徴を具体的に指摘して、それらがどのような効果をあげ、独特の作品世界を作り上げているかを、わかりやすく説明しなさい。